

すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう。

### 〈ヨナの怒り〉

ニネベの人たちは、心から悔い改めました。そして神は彼らの罪を赦し、彼らを喜ばれました。通常ならば、ヨナも共に喜ぶべきであります。けれども、神の怒りがやんだときから、ヨナの怒りが始まるのであります。彼らが、異邦人であるがゆえに、またニネベを滅ぼすことをやめたその憐れみに対して激しく怒るのであります。口にする信条と実際の思いとの矛盾、自己への思いと他者への思いの矛盾がさらけ出されております。

おそらく、ヨナの心境としては、ソドムとゴモラと同じような町であるがゆえに、滅ぼされるのが当然であると思っていたかもしれません。また、ヨナは、神の救いは選民だけであるというエゴがあったかもしれません。つまり、私たちは救われて当然であるが、彼らは救われるはずがないといったヨナの比較があったように思われます。

「わたしの言葉」、「わたしの国」など一人称の形が9回繰り返されております。そこからヨナのエゴの強さがうかがえます。そして、ついにヨナは、神がこのように憐れみ深く振る舞う世界に自分は存在したくないと言うのであります(3)。

### 〈ヨナの教育〉

主なる神は、ヨナを直ちにさばくことも、見捨てることもしませんでした。むしろ、ヨナを教育しようとして、問いかけられるのであります。最初は、「お前は怒るが、それは正しいことか」と問いかけられます。しかし、ヨナは、その問いに答えません。言葉で無理であるなら、主なる神は、ヨナに救いと苦しみを体験させます。

「とうごま」の木をヨナに与えます。「とうごま」は、およそ4メートルの高さに及ぶ木であり、種

子からヒマシ油をとって下剤ができます。また、第二次世界大戦のとき、日本各地でも栽培され、飛行機用の潤滑油として使用されていたようであります。

とうごまの木はヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰を作りました。それでヨナは大いに喜び、不満が解消されました。しかし、神は、虫と熱射の東風を送り、とうごまの木は枯れてしまいます。そして神は、ヨナに最後の問いかけをします。ヨナは「もちろんです。怒りのあまり死にたいぐらいです」(9)と神に不満を漏らします。神に不満を漏らすことが当然の権利でもあるかのように、ヨナは神に不満をぶつけます。

右も左もわきまえない人間であるヨナ、自己中心的な考えであるヨナ。そのヨナは、当然、神の目から見てさばきの対象であります。神にとっては、むしろそれだけいっそう憐れみの対象であることを語りかけます。神は、ヨナの自己中心的生活を逆手にとって教育をなさるのであります。ヨナをも異邦人をも包み込む主なる神の愛と憐れみが、ここでは徹底的に描かれているのであります。

「(主なる神は、) そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(ペトロ二3:9)。

私たちの信じる神は、すべての人を愛して惜しむ神であります。また、忍耐して私たちの悔い改めを待ってくださる神であります。どんなに私たちが神に不平や不満を言っても、忍耐してくださる愛なる神であります。

ニネベの人たちは神の忍耐において、悔い改めました。そして神は赦されました。おそらく、神の最後の言葉を聞いて、ヨナも悔い改めたのではないのでしょうか。私たちは、ヨナと同じように神に教育されています。そのことを自覚して、神の愛の深さを知り、悔い改めの愛に生きていくものでありたいと思います。(潮田 祐)

テキスト ヨナ書 4章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

### 〔単元のねらい〕

「すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう」。単元目標に賛成である。ここにも面白い筋書きがある。ヨナがとうごまの木を惜しんだ機をとらえて、神はニネベの人々を惜しむ御心を打ち明けられた。木が枯れたことに怒るヨナに、神も人が滅びることに怒る御自分の激情を示される。ニネベの人々の悔い改めと神の思い直しに対して、ヨナが怒ったその怒りは、神の恵みと憐れみの御心に逆行する怒りだったことを、教え諭したい。

## 「人の滅びを望まぬ神」

神さまのなさることが、どうてい受け入れられない。神さまのお気持ち、まったく分からない。そんな怒りを露わにして、神さまに訴える人がいました。「主よ、どうか今、わたしの命を取ってください。生きていたよりは死んだほうがましです」。預言者ヨナ、この人の激しい訴えに答えて、主なる神は問いかけられました。「お前は怒るが、それは正しいことか」。

彼の怒りの原因は、イスラエルの敵の国アッシリア、その都ニネベの王と住民を、神さまが赦してしまわれたことにありました。ダビデ、ソロモンが70年にわたって治めたイスラエル統一王国、それが北と南に分裂して戦争をするようになってから、イスラエルは次第に弱体化していました。それに乗じてアッシリア帝国は軍隊を派遣し、南北イスラエルを脅かして、莫大な金銀を貢物として要求し、幾度となく持ち去ったのです。この敵の国の都に赴いて、命がけで神さまの言葉を告げ知らせたのが、預言者ヨナでした。「イスラエルの神が仰せである！ お前たちの悪は神の耳に届いている！ お前たちの罪は神の目に明らかである！ このあと40日もすればニネベの都は滅びる！」と。

するとどうでしょう！ ニネベの人々が神さまを信じてしまうのです！ アッシリアの人々が自分たちの悪い言葉や行動を思い直し、イスラエルの神の前で悔い改め、身分の高い人から低い人ま

で粗末な衣をまとい断食するのです！ ニネベの人々が罪を捨てて悪から離れたことを御覧になると、イスラエルの神さまは思い直されて、預言者ヨナを通して告げ知らせた災いを下すことを思い留まられたのです！ 敵を裁いて滅ぼすのではなく、その人々を戒めて赦す。そのようになさる神さまに向かって、預言者ヨナは、激しい怒りをぶちまけています。

「わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは恵みと憐れみの神です。忍耐深く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方です」。この言葉によって、神さまに賛美と感謝を捧げることが期待されていたでしょうけれども、預言者ヨナはそうではなく、皮肉と不満を投げつけています。彼の怒りは正しいことでしょうか。少なくとも、一つ二つのことについて、正しいとは言えません。

一つはヨナ自身、神さまから赦された人だったということ。神さまから御言葉をお預かりしたのに、それを心の中にしまい込んで、伝えようとしなかったこと。預言者なのに、ご命令に背いて、逃げ出したこと。それでも神さまは、ヨナを連れ戻し、悔い改めに導き、背きの罪を赦し、彼をもう一度スタートラインに立たせてくださったこと。赦された罪人なのに、同じく赦された敵の国について怒っている。その怒りは、神さまの目から見て、正しくないのです

もう一つは人間として、神さまの御心と御業に言いがかりを付けることは出来ないということ。神さまは御自分が憐れもうと思う人を憐れみ、慈しもうと思う人を慈しむ方。イスラエルの民だからといって、そのまま皆を恵むことはなさらない。アッシリアの者だからといって、そのまま皆を呪うこともなさらない。あらゆる人に祝福を約束し、服従を要求なさる。不従順に対しては警告を発せられる。その上で、神の前に思い直し、罪を悔い改める人には赦しを与えて、災いを下すことを思い留まれる。このように思し召し、このように成し遂げる神に向かって、人間が怒ることは正しくないのです。

この一つ二つのことに気付かせるため、神さまは問いかけられたのでありました。「お前は怒るが、それは正しいことか」。しかし預言者は、神さまのお気持ちに気付きません。彼の怒りは収まりそうにありません。プンプンと顔を真っ赤にしながら、ヨナは都から出て行きます。ニネベの人々がこれからどうなるのか見届けようと、小屋を建てて座り込みます。そんな彼を、神さまは尚も赦しておいでになります。そして御自分のお気持ちを分からせようと、彼の生活に御手を伸ばされます。

真昼の厳しい陽射しに晒されて苦しんでいるヨナのために、神さまは一本のどうごまの木をはえさせられます。芽を出したかと思うと、その日のうちにみるみる伸びて、ヨナの背丈より高くなります。葉が茂ると日陰ができたので、ヨナはその木が生えて茂ったことをとても喜びます。いつしか彼の不満は薄れ、怒りも静まります。ところが翌朝、神さまはその木を虫に食い荒らさせられたので、木は枯れてしまいます。日が昇って、太陽がヨナの頭上に照りつけ、東からの熱風が吹き付けます。その木が枯れてしまったことを、ヨナは本当に悔しく思い、その木を枯らしてしまった虫に怒りがこみ上げます。いつしか、枯れてしまった哀れな木が、自分のことのように思えてきて、神さまのなさることへの不満と怒りがよみがえり

ます。預言者ヨナはぐったりとなって、ふたたびつぶやきます。「生きているよりは、死んだ方がましです」。

預言者ヨナの怒りとつぶやきを御覧になった神さまは、彼にふたたび問いかけられます。「どうごまの木のことでお前は怒るが、それは正しいことか」。ヨナは答えます。「もちろんです。あなたのなさったことを受け入れられません。あなたのお気持ちがさっぱり分かりません。わたしは不満でいっぱいです。怒りくるって死にたいほどです」。預言者はここでも、神さまのお気持ちを理解することができませんでした。

ところが！神さまはすかさず！ 預言者ヨナにたたみかけます。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたどうごまの木を惜しんでいる（悔しく思っている・哀れに感じている・その死に激怒している）。そのお前の気持ちは、神であるわたしが、お前に抱いている気持ちとそっくりなのだ。お前に命を与え、預言者に育て上げたのはわたしである。もしもお前が滅びたら、わたしはお前を惜しみ、悔しく思い、お前を死なせた罪に激怒するだろう。この気持ちは、ニネベの人々に対しても同じなのだ。わたしが命を与えた12万もの人間が、神を知らず、自分の罪もわきまえず、赦されないままに死んで滅びることを、どうしてわたしが望むだろう。一人の人の命でも滅びることを、わたしは決して望まない。わたしが望むことを、お前の望みとせよ。これがわたしの気持ちである」。

神の御独り子イエスさまは、滅びゆく罪人の死を御自分の死となさいました。それは人間が罪赦されて生きるためにほかなりません。神さまがそうしてくださったのですから、罪赦されて生きる私たちも、神さまが悲しまれることを自分の悲しみとし、神さまが喜ばれることを自分の喜びとしよう。ヨナの神が願っておられたことを願い、主イエスの父が望んでおられること望む。それが私たちの救いです。

(二宮 創)

---

[今週の暗唱聖句]

マタイによる福音書 18章14節

これら小さな者が一人でも滅びることは、  
あなたがたの天の父の御心ではない。

## 〈ねらい〉

神様は、ほくたち私たちを、心から愛してくださっています。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

## 〈展開例〉

さて、不思議だね。ニネベの人々は、ヨナさんを通して語られた神様のメッセージを通して、皆、悔い改めました。神様の怒りは静まったのです。でも、神様の怒りが静まった時に、今度はヨナの怒りが爆発しました。「ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。」(1)

きっと、ヨナさんは、ニネベの町を、聖書に出て来るソドムとゴモラのような、悪い人々が住んでいる町だと思い込んでいたのかもしれませんが。また、神様の救いは、ユダヤ人以外に伝えられてはいけないと思ってしまっていたのかもしれませんが。

ヨナさんはきっと、自分たちが救われるのは当然であったとしても、異邦人である、神様を信じない彼らが救われるのは納得いかないと、思っていたのだと思います。

「彼は、主に訴えた。『ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。』」(2-3)。

こんなに神様が憐れみ深いのでは、生きていたくないと思ったのかもしれませんが。物凄い、強情な人ですね。

でも神様は、ヨナを決して裁いたり、見捨てたりいたしません。ヨナが木陰として使っていた、とうごまの木を枯らすという、目に見える形の教育をされるのです。

「すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。」(6-7)

とうごまの木が枯れたことを惜しむヨナの心を用いて、神様がどんなに人々を愛しておられるのか、異邦人でもユダヤ人でも愛しておられるのかということを、教えられたのです。

神様は、すべての人が主イエス・キリストを信じて、救われることを願っておられます。この愛からは、ほくたち私たちも決して漏れてはいないのです。神様のこの愛に心から感謝をして歩んでいきましょう!!

## 〈お祈り〉

天の父なる神様。あなたは、すべての人を、そして、ほくたち私たちを心から愛してください。この愛を心から信じていることができますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

すべての人を愛して惜しむ神の愛を知って、悔い改めの愛に生きよう。

## 〈展開例〉

ヨナは、神様に不満を感じていました。ニネベの町の人たちは本当の神様を信じないで、神様に嫌われることをしていました。神様はそんな人々を見て、ヨナをつかわし、悔い改めを求めました。すると、ニネベの王様から家畜までみんな心から悔い改め、「神様ごめんなさい」と思い直しました。そんなニネベの人たちを見た神様は、憐れみ深く、ニネベを滅ぼすことをおやめになりました。

ヨナはニネベの町が滅ぶことを願って小高い丘からこの町をずっと見ていました。ところが、日が照ってとても暑いし、のども渇く！ 神様はとても暑そうなヨナを見て、とうごまの木を一晚のうちにグングン伸ばし日陰を作っていました。ヨナは神様の配慮に満足しつつも怒っています。

次に、神様はとうごまの木を枯らしました。

とうごまの木が枯れ、暑くて仕方がない、神様

に見放されてしまった！ ニネベも滅びないし、暑いし、死んだほうがまだ！ ヨナはとても不満に思っていました。けれども、神様はヨナに気づいてほしかったのです。一本のとうごまが枯れてしまうことでさえ、これだけ心が揺らいでしまうヨナ。

神様にとって、大きな町のたくさんの人が滅びることはもっと悲しいことです。小さなことで不満ばかり感じてしまう私たちですが、神様は私たちひとりひとり、分け隔てなく愛してくださっています。私たちが感じる不満は、神様の愛の前では本当に小さなことです。神様からたくさんの愛を注いでもらっていることを忘れず、毎日「神様。ありがとうございます、ごめんなさい」のお祈りをつづけたいですね。

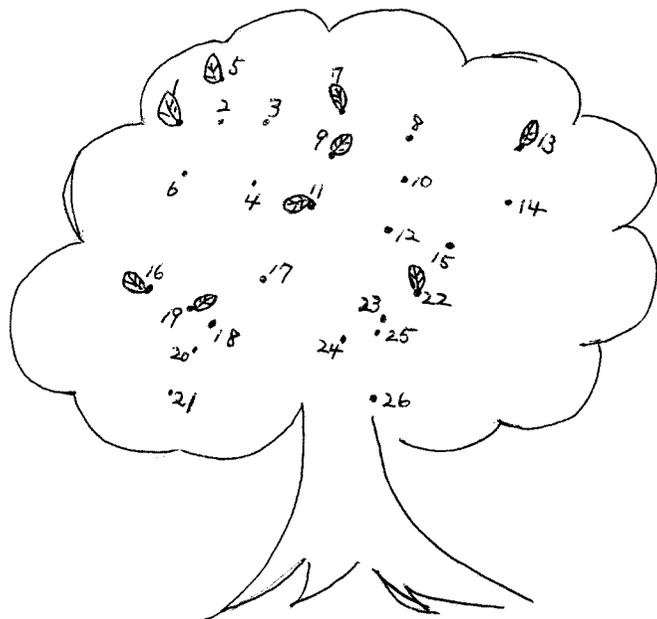
## 〈お祈り〉

神様。いつも私たちを愛して守ってくださいありがとうございます。私たちもまわりの友だちを赦し、愛することができるようにしてください。アーメン。

## 〈やってみよう〉

## ○とうごまの木のなぞ

とうごまの木には、  
どんな言葉が  
隠されているでしょうか？  
番号順に線で結んで  
みましょう。  
ただし、点から葉っぱは  
結ばないでね。



【答え】 カミノアイ

## 〈ねらい〉

神様は神様が造ってくださった全ての人間を愛してくださっていて、神様に立ち帰ることを望んでおられる。その神様の御心を心から感謝し、神様に仕えていく者としていただきたい。

## 〈展開例〉

- ヨナは神様はどんなお方だと言っていますか。  
→恵みと憐みの神、忍耐強く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思いなおされる方
- そんな神をなぜヨナは不満に思い、怒っているのでしょうか。  
→ニネベ町はイスラエルの敵国（アッシリア）の町で、今までイスラエルの人々はひどい目にあわせられてきたため、ヨナはニネベの町は滅ぼされるべきだと考えていた。
- 「ニネベの人を赦して欲しくない」と思うヨナについてどう思いますか。  
→ひどいことをされたらそう思っても仕方ないかも……。でも、ヨナは自分も同じように罪を犯し、神様に赦された者だということを思うべき。神様の憐みに不満を持つことは正しくない。
- 怒るヨナに神様はどうされましたか。  
→とうごまの木をヨナに与え、さらにそれを取

り上げられた。

- 神様はとうごまの木でヨナに何を伝えたかったのでしょうか。  
→とうごまの木が枯れたことにさえ怒るヨナに、人間を造られ、人間を深く愛してくださっている神様が、人が滅びることをどんなに悔しく悲しく思われるかということ伝えたかった。
- （聖書には書いてありませんが）ヨナは神様の御言葉を聞いてどう思ったでしょうか。  
→神様はたとえ自分に逆らう者であっても、深く愛してくださり、悔い改めて神様に立ち帰ることを心から望んでくださっている。そして、神様の愛は世界中の人々へ広く及んでいるのだということがよくわかった。  
自分のこと、自分の国のことばかり考えていた私をニネベの人々の救いに用いてくださった恵みと憐みの神をほめたたえよう。

## 〈祈り〉

神様。私たちをいつも深い愛をもって赦してくださることを感謝します。自分勝手な思いでいることの多い私たちですが、どうぞ神様の御心を思い、神様の御心になつた歩みをなすことができるようにしてください。



対話の手掛かりとして……。

- ①神さまは、ニネベの人々が悔い改めたことを知って、彼らを滅ぼすことを思い直されました(ヨナ3:10)。しかし、ヨナにとってこのことは不満であり、怒りを覚えます。「生きているよりも死ぬ方がまし」とさえ言うのです(3、8節)。私たちも神さまに対して怒りを覚えることがあるかもしれません。それはどういう時でしょうか。その怒りは果たして正しいのでしょうか。時に怒りは、自分が(自分だけが)正しいという偽りの確信から生まれることがあります。
- ②第4章後半はとうごまの木を巡って、神さまとヨナとの対話が記されています。とうごまの木の出来事とおして、神さまは、ヨナの中に芽生えている「惜しむ心」に気付かせることです。それも惜しむ心が間違っただけの方に向いていることに気付かせようとしています。「惜しむ」というのは、心残りに思う、残念に思うということです。ヨナがとうごまの木が枯れたことを惜しんだように、罪深い人間でさえも惜しむ心があるのです。たとえば、失ったものが、自分のものでなくてもです。とうごまの木が枯れたことに怒ったのは、ヨナがそれを大切にしていたからではありません。暑さをしのぐに都合がよかっただけなのです。
- ③また、とうごまの木の出来事とおして、神さまがヨナに教えたかったもう一つのことは、「神さまの愛」です。ヨナがとうごまの木を惜しんだように、神さまもニネベの人々を惜しまれます。しかもニネベの人々は、神さまのものであります。御自分のものであるということは、それだけ大切なものであり、愛しておられるということです。ニネベの人々が御自分のもとから離れること、失われることを惜しまずにはおれませんで

した。それゆえに、「ヨナよ、お前の怒りは正しいのか。そうではないだろう」と教えようとしているのです。私たちは自分の心にはとても敏感です。かすり傷さえも痛みを感じ、我慢できずに腹を立てます。なのに、他人が傷ついてもあまり気付きません。傷を負わせたのが自分であったとしてもです。まして、神さまの惜しむ心には気付かず、都合よく惜しむ自分の心だけを大事にします。でも本当に知るべきことは、神さまの愛です。神さまは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直されるお方であることを知らねばならないのです(2節)。

- ④ヨナ書は、神さまからの問いかけで締めくくられています。神さまの言葉に、ヨナがどう応えたかは記されていません。ということは、この問いかけに、どう応えて生きていくのか、その責任が今日の私たちに問われているのだと思います。この世の不条理に巻き込まれ、確かな答えを見いだせないまま、「自分は生きているよりも、死ぬがましだ」という怒りや叫びが至るところで聞こえてはこないでしょうか。いや、もしかしたら自分自身が、既にそのような叫びをあげているのかもしれません。
- ⑤その声に、神さまは真実に答えてくださいました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)。神さまはこの世と、この世に属する私たちを愛し抜いてくださったのです。生きていたって、何の喜びも意味もないと思っている「世」を、神さまは愛しておられます。生きるだけの価値と意味が、キリストの愛のゆえに確かに存在するのです。私たちは、この惜しみなく愛してくださるキリストの福音を伝える使命に遣わされています。